



ガハテ村通信

篠山ナマステ会 事務局 〒669-2341 篠山市郡家61-1 振替口座 00930-6-29629



オレンジの苗木を植樹するスタディツアー参加者とガハテ村の農業組合のメンバーたち

支援開始から10年記念し 村にオレンジを植樹

篠山ナマステ会は八月、PHD協会とネパールスタディツアーを実施しました。昨年度のPHD研修生、ビシヨ・ジット・ラマさんに再会し、日本での経験を生かして協同組合を組織するなど、早速リーダーシップを発揮している様子を目にしました。

また、今年はセティディビ小学校への支援開始から九十年となる節目の年です。これを記念し、ビシヨさんらの協同組合と協力してオレンジの苗木を植樹しました。今後三年間で徐々にオレンジを増やしていく計画で、近い将来、ガハテ村の特産品になるかもしれません。苗木はまだ小さいですが、大きな期待が込められています。

スタディツアー 報告 ビシヨさんがガハテに協同組合を設立

今年のスタディツアーは、八月十八日から二十七日までの日程で、篠山ナマステ会から三人、PHD協会スタッフ二人のほか、大学生など一般参加者八人の合計十三人の参加を得て行いました。ツアーについて報告します。

オレンジ実るか、3年後に期待

篠山ナマステ会は、今年二〇一〇年でガハテ村との交流十周年を迎えることから、記念植樹することを計画しました。そこで何の木を植えるか検討したのですが、昨年度のPHD研修生、ビシヨ・ジツト・ラマさんがガハテ村でのオレンジ栽培に意欲を持っているということ、オレンジに決定しました。

ビシヨさんは来日前からオレンジ栽培に興味を持っていました。以前からガハテ村にもオレンジの木はあったそうですが、きちんと栽培されているわけではなく、商品価値のあるものではありませんでした。そこでビシヨさんは日本でオレンジの栽培法を学びたいと考え、



ネームプレートが付けられたオレンジの苗木

たつての希望で和歌山でのみかん栽培研修が実現。摘果や剪定などの技術を学びました。

ビシヨさんは日本から帰国後すぐ、篠山ナマステ会のカウンターパート・SSSスタッフとなり、ガハテ村の開発担当になりました。そして、帰国報告を兼ねて村の人たちにオレンジ栽培の協同組合の設立を呼びかけました。村人たちは最初はなかなか集まってくれませんでした。ビシヨさん父子で熱心に説いて回り、二十五人の出資者を得て協同組合を設立しました。

植樹の場所は、ビシヨさんの父が提供した農地。かなり急な斜面ながら、ビシヨさん父子が段々畑に開墾してくれました。植樹は、予定していた日の前日に村内で葬儀があったため、一日延期して二十三日に実施。すでに協同組合によって二十本は植えられていて、残りの十本をツアー参加者とビシヨさんら組合員が協力して植えていきました。この十本のオレンジにはそれぞれ、植えた人のネームプレートが付けられています。

協同組合は今後も3年かけてオレンジ植樹を続け、ガハテの土に合うかを見極め、規模を拡大するか撤退するか判断するということです。

進学・就学できない児童が問題に

セティディビ小学校の現在の児童数は百四十五人。ガハテ村だけでなく、近くのラタマタ村からも多数の児童が通学しています。一年生には就学対象前の子供も含まれ、毎年人数が多くなります。しかし、鉛筆やノートを用意できないといった理由で子

供を学校に通わせない保護者がいたり、進級試験に不合格になるなどして勉強が嫌になり、途中から学校に来なくなる児童がいたりし、学年が上がるにつれ児童数が減っていきます。また、経済的な理由から進学できない児童も多いのですが、保護者と教員が十分に相談し合えてはおらず、学校運営委員会も有効な手を打てていないのが現状です。

SSSはこの状況に対し、セティディビ小学校内に就学奨励委員会(三人)を組織し、進学しない児童の家庭状況等の調査を行っています。

ツアー参加者がセ小で授業

今回は、昨年のツアーではできなかった授業参観が出来ました。教員の研修が進み、一斉授業に有効な掛図を活用するなど、授業に工夫を凝らしている様子が見られました。

また、多才なツアー参加者により、ペットボトルを使った簡易顕微鏡の製作や、折り紙指導の授業を行ったほか、「さくら」「幸せなら手をたたこう」など日本の歌を紹介して児童と一緒に合唱を楽しみました。普段、音楽や理科工作などの授業のないセティディビ小学校の児童たちにとって、貴重な体験になったことでしょう。



ガハテ村近くの学校を視察

SSSからの要請で、幼児から十一学年までの教育を行っている、ウマ・サハ・シクチャ・ラヤ・

ハイヤーセカンダリースクールの視察を行いました。同校は、ガハテ村と隣接したチャンデニVDCの山の頂上にあり、ヴィクラム暦二〇〇八年（西暦一九五一年）に創立されました。SSSが校舎の増

八月二十三日、二十四日の二日間かけて、来年度のPHD研修生の選考会を行いました。男性2人、女性4人の候補者の中から面接と家庭訪問を行って検討した結果、ラメス・カジ・シュレスタさんとバサン・ラマさんの二人を選出しました。

ラメス・カジ・シュレスタさんは二十五歳の男性で、独身。ガハテ村と同じマハデヴスタンのヒンワカ村出身です。十学年を卒業し、現在はヒンワカ村で両親と兄家族と一緒に約二百羽の規模で養鶏を営み、所有する土地と借地で農業をしています。牛糞を使った肥料も使っているそうです。

研修では、日本の農家が裕福であることから、日本式の農業の方法について学ぶ考えです。また、保健衛生にも関心があるそうです。



ラメス・カジ・シュレスタさん

来年度のPHD研修生、男女2人に決定



バサン・ラマさん

バサン・ラマさんは十九歳の女性。ガハテ村出身で、今年度のPHD研修生のミン・クマリ・タマンさんの友人です。十二学年を卒業してSLCを受験。ヒンディー語も話す才媛で、唄や踊りも上手だそうです。

SLC受験後に結婚し、一児のお母さんでもあります。夫と子ども、それに夫の両親と妹の六人家族で、トマトやインゲン、ジャガイモ、ゴマなどの栽培と、ヤギとニワトリの飼育をしています。市場や組合など村の農業について問題意識が高く、日本では編み物などの研修も行う予定です。

築に際して、五〇〇〇ルピー分の鉄筋やセメントなどの資材を援助するなどし、運営支援をしています。現在四百六十四人の児童・生徒が通っており、セティディビ小学校の卒業生も学んでいます。また、セティディビ小学校と同様、カーストの最下層とされるダリットの子供も多数学んでいます。

SSSが計画する就学奨励プラン

ウマ・サハ・シクチャ・ラヤ校のように、SSSはすでに就学支援のプログラムを実施し、実績を残しています。ガハテ村の周辺地域にある他の二校でも、それぞれ一人の奨学生がいるそうです。そして現在、セティディビ小学校卒業生の貧困家庭に対し、中等教育に当たる六〜十学年への就学を支援するための奨学金の支給を検討しています。

六〜八学年は政府から教科書が支給されますが、九〜十学年は教科書代で七〇〇ルピーほどかかります。このほか、制服代に約三〇〇ルピー、文具などに約三五〇ルピー必要になります。

SSSはまた、支援する地域の生徒の中でSLCの成績優秀者に対し、その努力を称えて記念式典などで表彰することや、さらにその優秀者が高等教育である十一、十二学年へ就学するための道が開けるよう、学費や制服などの支援がしたいと考えているそうです。これらのプランについて、篠山ナマステ会を含めさまざまな支援団体と今後、相談・連携を深めたいという希望が伝えられました。



ビシュヌ・マニさん



ラム・サランさん

11月、篠山にネパールがやってくる！ チルミューで10年記念イベント

篠山ナマステ会は十一月二十一日、篠山市小田中の篠山チルドレンズミュージアム（チルミュー）で十周年記念イベント「一日ネパールデー」を開催します。

「一日ネパールデー」は午前十時受付、十時半式典開始。篠山ナマステ会の十年の歩みと今後の展望について報告し、続いてPHD協会理事長の今井鎮雄さんを招き、「これからの国際交流」をテーマに講演してもらいます。

午後一時からはネパールから二人を招き、ガハテ村の現在の様子について報告してもらいます。

一人は篠山ナマステ会の現地通信員であり、カウンセラーパートナー・SSSのプログラムのコーディネーターでもあるビシュヌ・マニ・ネパールさん（三二）。もう一人は、セティディビ小学校創立以来の教員で、現在は副校長を務めるラム・サラン・バンダリさん（四一）。今年度のPHD研修生二人も来場する予定です。

また、二十一日の「一日ネパールデー」に先駆け、十三日から二十一日まで、写真や楽器、教科書、

音楽などでネパールを紹介するほか、「あなたもネパリ」と題し、ネパール民族衣装を着られるなど、体験企画も行います。

チルミューへの入場には大人六〇〇円、小人四〇〇円が必要。篠山市内の子どもは、チルミューパスポートで入場無料です。なお、篠山ナマステ会会員は、十一月二十一日の「一日ネパールデー」に限り受付で入場券を提示すれば入場料は必要ありません。

地域活動の報告

篠山で研修、高校生と交流も

今年度のネパールからのPHD研修生、ミン・クマリ・タマンさんとウルミラ・ライ・ダヌワールさんが、十一月に篠山での研修を行います。

ミンさんは二日から六日まで篠山産業高校東雲校で、実習を通して日本の農業高校の教育を体験します。学校での保健衛生や野菜栽培の実習、福住祭の準備に参加します。同年代の高校生との交流で、日本とネパールの相互理解を深める場になることが期待されます。

ウルミラさんは一日から六日まで、丹南健康福祉センターで保健衛生と乳幼児の健康管理などについて学びます。

味まつりで黒豆を販売

ガハテ村支援の原資とすべく昨年に引き続き、十月九、十の両日開かれた丹波ささやま味まつりで、黒枝豆の販売を行いました。黒豆は上田和夫副代表の農場をお借りして栽培したもの。イベント前日の八日に幹事で結束作業を行い、およそ百束を用意しました。



篠山特産館近くの篠山ナマステ会に協力してくださる方の駐車場をお借りし、店開きをしたのですが、九日はあいにくの雨模様のため観光客も思ったより少なく、呼び込みをしてもなかなか買ってもらえません。翌日になっても売れ残る心配があったものの、早めに店じまいしました。

しかし、翌十日はうれしいことに晴れとなり、朝早くからお客さんの出足は好調。一人が足を止め買ってくれると、また別のお客さんが買ってくれるということもあり、三時ごろには完売することができました。

植え付けから準備、販売と手弁当て汗を流してくれた幹事のみなさん、お疲れ様でした。来年は会員のみなさんも、ぜひご協力ください。